

したむきに

しづや りふかふ

龜鳴屋さんがめなくやという立派な出版社が在って、「したむきな人々」という崇高な書籍が出版されているが、その表紙のイラストがとても好きだ。

しわくちゃん薄つぺたい帽子をかぶってよれよれのハーフコートの背を丸め、俯いて顔の見えない人の斜め右方の後姿。

影が不自然なほど伸びて、拾メートルは先じゃないかと思われる板の塀まで達し、そこから塀を這い上がって、中ほどのところで項垂れている。

しかもその先の、遙か天空には、皓々たる月が…。

道路は未舗装だろう、ところどころ水溜り。電柱は木製で張り紙。火消用水の水槽も、蓋つきダストボックスも木製で、線路の傍らなのだろうか、鉄骨を組んだ柱と架線が見え、さらに遠くに黒いシルエツトで、工場と思しき煙突の遠景。

中景に、おでん屋の赤提灯が侘びしき灯りを漏らす。人の気配は他にない。

きつと昭和三十年代ぐらいまではよく見られた光景だろう。自分も空気を知っている。

電柱の張り紙には「龜鳴屋」とある。何となく、昔プロレタリア小説を書いていた人の中には貧しさのあまり紙が手に入られず、電柱の張り紙を剥がして作品を書いていた…などと言うエピソードを髪髯する。

たとえ現実はまだ現実でしかなく、物理的な法則があるだけの非情の世界で、諸々の考概は本質性も根拠もない虚疎架空であり、正義も真実も礎であるべき論理性が検証不能な方法論であり、無常無我であつたとしても、人間は努力して前向きに生きなければならない。望みなくしては、希わなくては、上を向かなくては生きていけない。だけど時々下を向こう。いいじゃないか、別に。

最後まであきらめるつもりはないし、書かない人生なんて考えられないし、読まれようが読まれまいが書きたい。ただ努力を尽くして、心を護り抜くだけだ。そこに生命の源泉が滾々と湧くのだから。生きることは、生存ではない。

それはそれとして、齢五十も何年か過ぎると、だいぶ先が見えて来る。物理的にもやれることが限られる。健康上の問題もある(昨日から脾臓が痛い。何だろう？　そう言えば、血圧の薬を飲み忘れたが、それは関係ないよな)。いつ、どこで死ぬのかは、誰にもわからない。時々、哭くことだって、人間の一部だ。豊かに生きて行こう。こうやって、思いを馳せることができるうちに。

痛みも、煩悶もなく、静かに日曜の秋の午後を過ごせる今この一瞬が、最高の幸せなのだから。いずれ、喪われてしまうものなのだから。そのときになって、無事で健康でいられたころは、何もわかつちやいなかったなあとなどと思ふものなのだから。その愚かさの繰り返しはどうしようもない。

閑

